



## テーマ：自然資源管理とジェンダー

### — 目次 —

◇ 巻頭メッセージ ……1

◇ メイントピックス

- 自然環境保全分野における  
ジェンダー視点の取り組み ……2
- JICA のジェンダー主流化の取り組み ……4

◇ プロジェクト紹介

- ネパール国 地方行政強化を通じた  
流域管理向上プロジェクト ……5

◇ 森林・自然環境グループ 職員紹介 ……6

◇ 着任のごあいさつ ……7

## ■ 巻頭メッセージ ■

JICA 地球環境部審議役兼次長（森林・自然環境グループ長） 森田 隆博

人間を長くやっていると、誰しも一度や二度は「嗚呼（ああ）、今度生まれてくるんだったら女（男）に生まれてみたい…」なんて思ったことがあるのではないのでしょうか？ 現実生活の中で、女（男）に生まれ変わるのは、なかなか勇気が（そしてお金も）いることで、一線を踏み越えるハードルが高いのですが、魚の中には生涯のうちに性が変化する種類がいるそうです。

映画「ファインディング・ニモ」でおなじみのクマノミはすべてオスとして生まれます。そして、体が最も大きいオスがメスに性転換し、オスとしてつがいになるのは2番目に体の大きいクマノミだけ。なんて厳しい世の中（魚（ぎょ）の中?）でありませうか。3番目以降のオスたちの行く末を思うと、他人事とも思えず、切なくなります。ほんと人間でよかった…。はたまた、コブダイは生まれた時はすべてメスで、群れの争いに勝った1匹だけがオスになってハーレムを形成するそうです。これもまたすさまじい（特に羨ましくはありません、念のため）。

この世界で生き延びるために柔軟に男女の役割を使い分けている、とてもジェンダーフリーな生き方を実践しているクマノミやコブダイを思うと、私たち人間の世界でも、よりよい世界の実現のために、男女の役割とその境界をもっと柔らかく捉えてもよいのかもしれない。

話を人間の世界に戻しましょう。男女は生まれながらにして平等であるべきという理念を追求することの尊さは論を待たないのですが、私たちが取り組んでいる森林・自然環境保全分野の開発事業では、ジェンダー主流化は、男女間に存在する差異や力関係を踏まえることで開発効果を最大化する極めて実用的なアプローチでもあります。

例えば、JICAの研修に参加したケニア、マラウイの女性からは、男性が出稼ぎなどで地方から出てしまい植林等を女性に頼らなければならない地域が増えてきている中で、父系及び父権制の慣習的土地の権利関係が女性の植林活動への参加の障壁になっている、との声も聞かれました。

これは、男女間にどのような役割分担や力関係があるのかに着目することが、持続可能な自然資源管理の実現のためには必須であることを示す証左ではないでしょうか。

今回の自然環境だよりでは、誰一人取り残さない、インクルーシブな自然資源管理の実現に向けたジェンダー主流化の取り組みをご紹介します。

余談ですが、ジェンダー主流化のテーマソングを一つ選ぶとしたら、私としてはボブ・マーレイのNo Woman No Cryを推したいですね。誰もが幸せになれる理想の社会を目指そうよ、といった雰囲気がこの曲から伝わってくるような気がします。

一層のジェンダー主流化の実現に向けて、みなさまからのご意見、アドバイス等がありましたらお寄せいただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。



薪炭確保のための植林・育林  
(マラウイ ※)



プロジェクトによる耕作方法の改善により、増加した収穫を喜ぶ女性たち  
(マラウイ ※)

※ シレ川中流域における農民による流域保全活動推進プロジェクト  
<https://www.jica.go.jp/oda/project/1200067/field.html>

## ■ メイントピックス ■

### 1. 自然環境保全分野におけるジェンダー視点の取り組み

JICA 地球環境部 森林・自然環境グループ 自然環境第二チーム 稲川 武

#### ジェンダー勉強会の開催

森林・自然環境グループでは、4月18日に内部勉強会「自然資源管理におけるジェンダー主流化」を開催しました。本勉強会は、昨年度、当グループがジェンダーの専門家の大崎麻子先生と作成した内部参考資料「持続可能な自然資源管理とジェンダー ハンドブック」の成果品発表の場で、大崎先生を講師にむかえハンドブックの内容をご紹介いただきました。

大崎先生のご発表では、はじめに持続可能な自然資源管理におけるジェンダー主流化の加速化の現状として、森林での男女の活動の違いや森林資源のガバナンスへの女性の関与状況をウガンダの例を用いて紹介いただきました。続いてジェンダー主流化の具体的手法となる男女間の役割分担の把握、資源へのアクセスとコントロールの度合い特定、格差の背景にある影響要因分析の3つのステップを紹介いただき、最後にGCF（緑の気候基金）のプロジェクト・サイクルにおけるジェンダー主流化の説明がありました。

発表後には活発な質疑応答・議論がなされました。参加者からはジェンダー主流化は「格差を生む文化的規範を乗り越える社会変革を促進する」、「パラダイムシフトが起きつつある」、「オプションではなくマスト」といった肯定的意見から、「ジェンダー分析には時間・コストがかかる」、「伝統的文化の破壊につながるのでは」といった疑問も投げかけられました。勉強会には、ジェンダー研究の第一人者で上智大学名誉教授の目黒依子先生も参加されていましたが、こうした疑問に対し先生からは、様々な分野のジェンダー主流化は「コストではなく将来への投資である」、「女性を含め誰かの犠牲の上に成り立つ社会、開発は変えるべき」、「ジェンダー平等促進は文化の破壊ではなく、再生」とのご説明をいただき、大変印象的でした。また、実務レベルの対応として「政策レベルからいかに現場レベルに落とし込むかが課題」、「JICA 事業で取り組んでいる内容をジェンダー視点で位置づけ直すことも必要」、「好事例の共有が重要」、「ジェンダーに取り組む NGO・シンクタンクと協働することが重要」といった意見が参加者から出されました。

最後に目黒先生より、人間の安全保障やSDGs（持続可能な開発目標）理念の「誰一人取り残さない」、また持続的・効果的な開発アプローチからジェンダー視点が重要である点が、再度強調されました。

勉強会後のアンケートには、「次の勉強会では、ジェンダー主流化の理念やアプローチをどう事業に活かせるかまでカバーしてほしい」、「今後、ジェンダー主流化のアプローチを事業に取り入れ、どうなったかの経過を踏まえ、



講師の大崎麻子先生



活発に質疑・意見が出されました



ジェンダー研究の第一人者  
目黒依子先生



ハンドブックを改訂してほしい」といった意見がありました。

## | 今後の展望

自然環境保全分野においては、住民参加による保護区管理、地域住民の生計向上の促進などにおいて、地域の自然資源に依存した生活を営んでいる住民の多様性や自然資源管理における女性の役割への認識は不可欠であり、これまで以上に意識的にジェンダーの視点を取り込んで行くことが必要です。

たとえば森林との関係では、ジェンダーにより森林活用やニーズに違いがあり、それが選好樹種の違いにも表れます。女性は薪集め、家畜の飼い葉集め、家族の食料の確保等に従事しているが故、薪や飼い葉になる広葉樹や食用の果樹を求める傾向にあります。他方、男性の関心・ニーズは、所得・現金収入取得が多く、まっすぐ育つて材木として売れる木を求める傾向にあります。また、林業は伝統的に男性が担っている、あるいは意思決定は男性が行うものという思い込みのもと、プロジェクトによっては村の男性にしか意見を聞かない場合もあります。植林するのは男性かもしれませんが、苗木の世話をするのは女性であり、女性に関心を持たないと樹木は育ちません。男性の意見やニーズだけに対応すると、家族が生きていくための薪や飼い葉が入手できなくなります。このように森林資源の活用に関して、男女間にどのような役割分担や力関係があるのかに着目することで、限りある資源の持続的かつ公平な活用を実現することができます。ジェンダー視点なしに、森林資源を持続的な開発に活かすことは不可能でしょう。

さらに、国際的レベルの議論でも、気候変動に関してはセーフガードの中でステークホルダーの多様な参加、コベネフィットの追及が含まれ、またSDGs、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）、生物多様性条約（CBD）などの国際的な政策的・法的枠組みには「ジェンダー視点の必要性」が基本原則として明文化されています。加えて、2020年以降の「パリ協定」の実施に向けて、REDD+の実施を促すための資金メカニズムであり、JICAが申請代理機関の承認を受けたGCF※においては、申請時にジェンダー評価やジェンダー行動計画の提出が求められるなど、「ジェンダー主流化」がパートナー連携促進や外部資金獲得の要件になりつつあります。

ジェンダー視点は、もはや組織としての責任と義務になりつつあり、自然環境保全分野におけるジェンダー主流化の重要性は今後ますます高まっていくことでしょう。

---

※ [https://www.jica.go.jp/press/2017/20170706\\_01.html](https://www.jica.go.jp/press/2017/20170706_01.html)

## 2. JICAのジェンダー主流化の取り組み

JICA 社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 清水 亜希子

JICA はジェンダー平等・女性のエンパワメントを、人間の安全保障の視点に基づく公正で持続可能な開発に向けての重要な課題と位置付けています。このような認識のもと、JICA ではジェンダー平等・女性のエンパワメントを、開発協力のあらゆる分野で考慮すべき重要な視点と捉え、ジェンダー主流化に向けた取り組みを行っています。第4期中期目標（2017年度～2021年度）においては、ジェンダー案件比率※（支援額ベース）に40%という高い目標を掲げています。また同中期計画では、質と量の両面からジェンダー主流化の拡充が求められています。

ジェンダー主流化は、開発効果を高め、またジェンダーの視点を考慮しないことによる負のインパクトを防ぐことにもつながります。そのためには、まずは案件形成時に、分野や事業におけるジェンダーギャップの現状や課題を把握するための情報収集や分析を実施することが、不可欠な第一歩となります。最近では、企業の投資家にとって、対象企業が「女性」の視点に立った事業や運営を行っているかが投資の際の重要な判断基準になっているなど、開発に限らず、様々なステークホルダーにとってジェンダー主流化を実施する重要性が高まっています。JICAも、もちろん、その例外ではありません。当室では、このような動きを後押しできるよう、引き続きジェンダー主流化の推進を強化し、質の高い開発を目指して各部署に働きかけていきたいと考えます。



プロジェクトの説明に耳をかたむける  
村の女性たち（ベトナム<sup>1</sup>）

### 自然環境保全分野の協力に対する期待

森林・自然環境グループは執務参考資料として「持続可能な自然資源管理とジェンダーハンドブック」を作成し、4月にその成果の共有のため勉強会「自然資源管理におけるジェンダー主流化」を開催しました。このようなジェンダーに焦点をあてた取り組みを森林・自然環境グループ自体が企画し、実施したことには大きな意義があると思います。ジェンダー主流化の推進を担っている当室としても大変ありがたいことです。

当該セクターにおいては、例えばGCFでジェンダー評価とジェンダー行動計画の提出が申請の必須要件になったように、ジェンダー主流化が急速に進んできています。このような動きは、「ジェンダー不平等の解消」というSDGゴール5の達成推進とともに、ジェンダー視点に立つ政策立案や案件実施が持続的自然資源管理の効果をより高める、という過去の経験から派生したものだと考えます。JICAは長年、住民参加型自然資源管理を推進し、地域住民との関係において多くの貴重な事例や教訓を持っていると思われれます。今後は今までの成果の上に、よりジェンダーの視点を社会経済分析や案件形成・実施・監理に反映させ、森林・自然環境グループ、そしてSDGsも目指す「人と自然との共生」の実現を確実に進めていってほしいと思います。



村の現状を把握するために地図を作成。  
生活の中で重要な、水汲みの場所  
などが描かれている（ホンジュラス<sup>2</sup>）

※ 年度内に先方政府と合意文書もしくは贈与契約を締結した案件のうち、案件開始時に次の3つのいずれかに分類された案件の割合。 1. 「ジェンダー平等政策・制度支援案件」 2. 「女性を主な裨益対象とする案件」 3. 「ジェンダー活動統合案件」

1. 北西部水源地域における持続可能な森林管理プロジェクト

<https://www.jica.go.jp/project/vietnam/004/index.html>

2. エル・カホンダム森林保全区域のコミュニティ住民参加型持続的流域管理能力強化プロジェクト

<https://www.jica.go.jp/project/honduras/003/index.html>

## ■ プロジェクト紹介 ■

～ジェンダー視点を取り入れた JICA の森林保全案件～

### ネパール国「地方行政強化を通じた流域管理向上プロジェクト」

#### プロジェクトの背景と概要

ネパールでは、人口の約半数が山間地域に住んでおり、急峻な地形による斜面崩壊や農地の土砂流出が生産性の低下をもたらしています。また、これらの住民の多くが貧困層で、貧困を背景とする森林の無計画な伐採なども土砂流出に拍車をかけています。そのような状況の下、プロジェクトでは森林保全に取り組む際、森や水源等の村の資源の管理や、コミュニティ開発の全ての段階に住民たちが参加することを促進する仕組みを作り、土砂崩れ防止、水源保護や歩道整備などの土壌保全活動を含む村づくりを取り入れて、貧しい住民たちが森の再生を行うようになりました。

#### ジェンダー視点に立った取り組み

プロジェクト対象地域において、森林の日常的な利用者は女性でしたが、女性、特に貧困層や被差別カーストの女性が住民たちの活動に参加すること、ましてや発言し意思決定に参加することは非常に困難なことでした。そのため女性たちのプロジェクト活動への積極的な参加を目指して、次のような活動が実施されました。

女性による地元の資源を活用した生計向上活動の実施のために組織された POWER (Poor, Occupational caste, Women's Empowerment for Resource Management) グループは、貧困層や被差別カーストの女性を優先して構成された最大 30 名の集落レベルの住民グループです。POWER グループはプロジェクトからの資金援助を受け、基礎識字や自身の意見発表能力向上、グループとしての交渉力向上、畜産や作物栽培等の生計向上活動を実施しました。

POWER グループの活動を通じて、女性たちは、自信の構築と自分たちのニーズや意見を伝える能力、生計向上手段を得ることによって、コミュニティ活動について積極的に発言・関与できるようになりました。また、自ら働きかけてプロジェクト外から支援を取り付けることもできるようになりました。

プロジェクトで中心となるのが、POWER グループの上位に位置する住民グループである集落委員会です。集落委員会は、コミュニティの意思決定機関であり、村の課題を発掘し、課題に対応し活動の実施から事後評価までの工程を主体的に進めます。集落委員会は概ね男女 9 名のメンバーのうち、3 分の 1 以上を女性、2 名を POWER グループより選出することで、女性たちの声が反映される仕組みができています。

ジェンダー視点に立った取り組みにより、このプロジェクトは、住民が男女共に参加する効果的な森林保全活動のモデルになりました。その普及により、さらに広くネパールの森林保全に貢献することが期待されます。



薪集めは女性の仕事。日々の過酷な労働を女性が担っている



ショウガ栽培の研修。女性グループに生計向上活動の支援を行う

ネパール国 地方行政強化を通じた流域管理向上プロジェクト

<https://www.jica.go.jp/oda/project/0800382/index.html>



## ■ 森林・自然環境グループ 職員紹介 ■

JICA 地球環境部 森林・自然環境グループ 第一・二チーム 企画役 三浦 真理

皆様、こんにちは。森林・自然環境グループ（以下、「森林G」）の三浦真理です。今号から、読者の皆様に森林Gをより身近に感じていただけたら、ということで、私たちスタッフの経歴や業務を紹介させていただくことになりました。今号の評判をみて続けていくか決めるそうですので、次号このコーナーがなかったら、事情を察していただければ幸いです。

### これまでの歩み

私は、農学部卒で、中途採用でJICAに入構した後、大阪センター、農村開発部を経て、インドネシア事務所で農林水産セクターを担当しました。ちょうどノルウェーが約1,000億円のREDD+資金をプレッジしてREDD+バブルのようなものが起き、JICAが最大ドナーであった時代からマインドセットが必要とされるような時期で、支援のあり方を改めて考えさせられる日々でした。その後、海外長期研修制度でオーストラリアの大学院の公共政策スクールで気候変動修士号を取得しました。

帰国後は外務省国際協力局に出向し、OECD DAC（経済協力開発機構開発援助委員会）やグローバル・パートナーシップ（SDGでは目標17）に携わりました。ちょうど、SDGsやパリ協定が採択された時期でした。

外務省から現在の部署に配置になり、そろそろ2年半になります。（ところで森林Gラインの女性管理職の割合は部長を含め6割で、ちょっと前まで理事も女性でした。）ここでは、アフリカの案件や、JAXAとの連携事業であるJJ-FAST<sup>\*</sup>開発、TICADなどを担当している他、REDD+事業の戦略づくりや、FAO等とのドナー連携の窓口業務を行っています。

### ジェンダー主流化について思うこと

ジェンダー主流化については、業務でも悩みながら取り組んでいるところです。私は大学院の修論で、JICAのインドネシアでの保全事業を題材に、「公平な」利益分配とは何かについて分析し、REDD+事業への教訓をまとめました。事業では、ジェンダー平等に配慮され、女性のワークショップ等への参加がありました。一方で、インタビューをしてみると、意思決定は家長である父親や夫がほぼ行っていたこと、研修にも参加したかったものの、家事や子育てで叶わなかったこと、そういったことは夫に任せており興味もなかった、という意見がありました。全体的には、プロジェクト活動に関心がないわけではないが、活動に主に対応し、意思決定を行うのは男性の役割である、と受け入れていた女性が大多数のようでした。

近年、ジェンダー主流化への国際的取り組みが一層強化され、GCFの



来年3回目の宇宙ミッションを予定されている野口聡一宇宙飛行士と（筆者右側）。REDD+とJJ-FASTで是非なにか一緒にやりましょう、と言ってくださいました



大学院の同級生の約8割はAusAID支援の途上国からの留学生（当時）。キャンペラは静かな街で、勉強するか、たまにパブで息抜きするかのほぼ二択でした



修論調査で訪れたインドネシアハリムン・サラック山国立公園における対象村でのインタビュー（筆者 上右）

<sup>\*</sup> JICA-JAXA Forest Early Warning System in the Tropics (JICA-JAXA 熱帯林早期警戒システム)

[https://www.jica.go.jp/press/2016/20161114\\_02.html](https://www.jica.go.jp/press/2016/20161114_02.html)

提案書でもジェンダー等に関する行動計画の提出が求められています。これは非常に重要なことだと思います。しかし、事業でジェンダーを考える際に、文化や慣習という問題も決して無視できないと感じています。外部者であるドナーの私たちは、ジェンダー平等を押し付けるのではなく、その視点を、例えば村長や村人に共有し、そして、その村や世帯それぞれが、女性やあらゆる立場の人々が等しく意思決定に関わり、事業による恩恵へアクセスできるようになるためのプロセスを支援する、と考えれば、ゆっくりでも社会の変革に繋がっていくのではないかと考えています。

## ■ 着任のごあいさつ ■

JICA 地球環境部 技術審議役 山崎 敬嗣

この4月に地球環境部技術審議役に着任した山崎<sup>なかし</sup>敬嗣です。林野庁からの出向であり、3月までは北海道富良野地方の国有林を管轄する上川南部森林管理署で、台風災害の復旧などに汗を流していました。林野庁本庁に加え、かつて出向していた在マレーシア日本大使館、環境省自然環境局での経験を生かし、森林・自然環境分野の国際協力に少しでも貢献できれば、と考えておりますので、よろしくお願いいたします。



最後までお読みいただき、ありがとうございました。

自然環境だよりバックナンバー

[http://www.jica.go.jp/activities/issues/natural\\_env/nature\\_info.html](http://www.jica.go.jp/activities/issues/natural_env/nature_info.html)

JICA 地球環境部森林・自然環境グループ 自然環境保全課題支援事務局

TEL: 03-5226-6656 FAX: 03-5226-6343 e-mail: [jicage-nature2@jica.go.jp](mailto:jicage-nature2@jica.go.jp)